
——Cross Guardians ?—— **四つの国の物語**

夜月 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

—— Cross Guardians ? —— 四つの国の物語

【Nコード】

N9468V

【作者名】

夜月 零

【あらすじ】

この国のメイド主人公アリアは、昔の記憶がなく、いつもどおり普通に日々を過ごしていた。そしてある日を境に、この国の危機が！？アリアの親友、王子たち4人とこの国を救えるのか！！

序章 ムカシノハナシ

むかし、むかし、あるところに、ひとつの国がありました。

その国には、王様と、四人の王子がいました。

一人目の王子は、赤い瞳の赤の国の王子、

彼は、正義感が強く、一番に民の事を考える人でした。

二人目の王子は、青い瞳の青の国の王子、

彼は、とても賢く、国の子供達に勉強を教えていました。

三人目の王子は、緑の瞳の緑の国の王子、

彼は、自然をととても愛し、自然でモノを作り、民に分けていました。

四人目の王子は、黄の瞳の黄の国の王子、

彼は、陽気な性格で、力持ちで、動物に好かれていました。

この四人の王子達は、国の民にとっても愛されていました。

そう、五人目のができるまでは――。

第一章 平和な日々

「・・・さああああん、」

一人の少女の声が、暗い王宮に響く、

「行かないで、お母さああん、お父さああん、」

母「ごめんね、アリア、お母さん達もう行かないきゃ、」

その少女の母親と思しき女性が悲しそうな顔で、少女に囁く、

「いやっつ、いけないで、」

父「少しの我慢だよ、アリア、すぐ帰ってくるさ、それにここは王様もいるし、安全だよ」

「でも・・・」

うつむいている、少女に王様がこう言った。

王「大丈夫だ、この二人はきつと帰って来る、信じて待つてよう、」

父「・・・では、もう行きます王様、・・・最後に頼みたい事があります、」

王「何だ？何でも言うてみなさい、」

父「この子を頼んでもいいですか、最後かもしれないので、」

王「ああ、わかった、でもできるだけ無理をするなよ、だめだつて分かったらすぐにここに来るんだ、

そして、最後なんて言うんじゃない、」

二人「ありがとうございます、では行ってまいります」

王「ああ、気をつけてな、できればお前たちと、一緒に戦いたかった、」

父「王様、必ず帰ってきます、では、」

「行かないでっつっ、」

。

ピピピッピピピッ

「行かないでっつっ！・・・って夢かあ・・・」

最近小さいころの夢を見るな・・・。

とは言っても、この記憶しかないんだけど・・・

私は、記憶がない、そしてこの王宮のメイドをやっている。

そして私の名は・・・って、あああー！！！！

「やばつつ遅刻！！」

。

「はあっ、はあっ、何でこんな広いんだろ、王宮って・・・」

あ・・・申し遅れた・・・

私の名は、アリアってさっき説明したよね？あれ？してなかったかな？

「・・・っあ！！」

向こうで、誰かがこちらに手を振っている。

「マロン！！」

手を振っているのは、私の仕事仲間兼大親友のマロンだ。

「ごめん、遅れた・・・」

マ「やっぱりの夢のせい？」

「うん、またみちゃった・・・」

ちなみに、マロンはこの夢の事を知っていて、相談相手になってくれている一人だ。

マ「大丈夫？・・・あ！！そっいえば女王様が、アリアを呼んでいたよ、」

「そうなの？分かった、ありがと、じゃあ先いつてるね」

マ「うん、分かったじゃあ後でね、」

。

「一体何の用で、女王様に呼びだされたんだろう？・・・もしかして・・・怒られるのかなあ・・・」

怒られるようなことはしていないのだが、前まではいろいろなミスをして怒られていたので、

どうしてもそう考えてしまう。

考えているうちに、女王様の部屋の前まで来ていた。

「よっし、行くぞ！！」

コンコンコンッ

「失礼します、」

女「誰じゃ？」

女王様の声は落ち着いていた、どうやら怒っていないようだ、

「女王様の命で、来ましたアリアです」

女「おお、アリアが待っていたぞ、入れ、」

「はい、失礼します」

ガチャ――。

「・・・・・・」

女「何そこで突っ立ておる、早うこっちへ来い・・・わらわは怒ってなどないぞ？」

ただ、紅茶を飲んで話がしたかったただけだ、安心しろ、
うつっ読まれてたのか・・・

「はい、」

私が座ると、女王様が立って、紅茶を入れようとしたので、

「女王様、私がやります」

これでも王宮のメイドだ、これくらいやらなければ、

女「いい、わらわが呼んだのだから、これくらいやらせてくれ、それとここではふつーに話してよいぞ？」

わらわは堅苦しいのは苦手だちなみにお前の親友もふつーに話していたぞ、

こうゆう風に言われると、どうしても気が引ける、

アリアの前に、花柄のいかにも高級そうなティーカップが置かれ、

女王が紅茶を注いでく、

女「それにしても、驚いたぞ？わらわの部屋に入ったとたん、

この世の終わりみたいな顔をしておったからな、」

「ああ、私がまた怒られるのではないかと思つて・・・」

女「まあ、前までは・・・な？今は、ふつーに話したただけだ、今日呼んだ理由の一つだしな」

「はあ、そうなのですか？」

何を話すのだろう・・・？

女「まあ、最初に本題に入ろう、今日は何の日か覚えているか？」
今日・・・そういえば・・・

「え・・・と・・・私の母と父の命日のことですか？」

女「ああ、そうじゃ、正確に言くと王宮^こから離れた、というべきなのかもしれん」

「そうなのですか？初耳です」

女「なにっ！王様に言ってなかったのか、あの王様^{バカ}め言ってなかったのか、

後で一発殴ってやる」

こう言っているが王様と女王様は恋愛結婚しているので、すごく仲がいい、

「ふふふっ」

女「なっ／＼／なんじゃ、」

このときの女王様は結構可愛い、でもこんな一面は信頼しているものにしか見せないと女王様は言っていたが、国全体にこの一面はもうばれているので、女王様「可愛いと国民は思っているのだ

とはいっても、仕事のときになるとかつこ良くなるので、大人の女性として尊敬している

「いやあ、ほほえましいなと思って」

女「そうでもないぞ／＼／コホンッ、・・・でもやっと笑ったな、」

「え？？」

女「最近、ちつとも笑ってないと思ったからな、」

でも、さすがこの国の女王様よく見ているなあ

「はあ、やっぱりばれていましたか・・・」

女「ああ、接待しているときだつて無理やり笑っていたらどう？バレバレだ、

でわらわは考えたのじゃ」

「考えた？」

女「それはな、」

話によると、両親の墓参りにかねて今日一日休暇を取れと言ったことだった。

「いいですよ、仕事がまだあるので終わってからでも墓参りできま
すし、」

女「はあ、全くおまえは・・・おまえの母親に似ておるな、いつ
も仕事、仕事、言って

倒れるまでやめなかったからな、ま、そこがあいつのいいところで
もあったり、弱点でもあったな、」

「そうなんですか？そういうえば、女王様と私の母って親友でしたっ
け??」

一度だけ、聞いたことがある、どこで聞いたのかは忘れてしまった
けど・・・

女「でした、じゃない今もだ、そうだせつかくだから少し話してや
ろう、」

女王様の話によると、女王様「リオンが幼い時、アリアの母と出会
って友達になって、

やがて、親友になったそうだ、そしてリオンが女王様になると知っ
たアリアの母は、

”リオンが女王になるんだったら、リオンを守る兵士になる”と言
って、頑張って兵士になったという

そして、しばらくするとアリアの母は兵士から上級騎士まで上り詰
めた、

そして男でもなかなか取れないのに女がとってしまったとその当時
の大きなスクープにもなったそうだ。

女「お前の母親はかなりすごかったんだぞ？でも、少し弱点があっ
てな、」

「弱点？」

そんな強い母にも、弱点があるんだ。

女「ああ、何だと思う??」

「うーん・・・上司？」

女「ぷつつ、はははつつ、やっぱりそういうと思ったよおまえは、

お前の母も同じことを言っておったぞ」

「え？違うんですか??」

私には、それくらいしかないんだけど・・・

女「しょうがない教えてやろう、それは・・・」

「それは・・・？」

女「”恋”じゃ、」

「こつ・・・恋ですか??」

”そんなの”が弱点だなんて知らなかった・・・

女「そうじゃ、そうじゃ、おまえの母は上級騎士になってから少し
様子がおかしくなつてな、

気になつたからここに呼んで聞いてみたんじゃ、そしたら顔を
真っ赤にして何にも話さなくなつてし まつてな、で、しばらく
して様子を見てみたら、一人だけあきらさまに態度が変わつていて
な、

それでわかつたんじゃ、そいつに恋をしているんじゃないかと、

「

「で、どうなつたんですか??」

女「予想が的中してな、一年たつたら結婚しておつた、」

「おお!!」

じゃあ、その時に会つた人が私の父親だつたんだ。

女「そうじゃ、お前はどなのじゃ？」

「なつ／＼／＼い、居ませんよ!!」

女「そうか？この城にはいっぱいいるぞ??例えば王子達とか、仲
はいいだろう？」

「い、いや、いくらなんでも、メイドと王子はダメでしょう・・・」

女「よいではないか？ほかの国でもそういうことはあることはある
からな、この国は大丈夫だぞ？」

さいですか・・・

「で、でも、あの人たちは大事な友達ですから！！恋愛とかじゃないんですよ・・・」

女「本当か？あやしいのう」

「ほ、本当です・・・」

女「なんじゃつまらん奴め、まあよい、女はいつかは恋をするからのう、それまでが楽しみじゃ」

「なっ／＼／＼／、」

よかったのかな？

コンコンコンツ

突然、ドアのノックがなった

女「誰じゃ？今は休みの時間じゃぞ！！」

ドアの外から、兵士の声がした

兵士「すみません女王陛下、緊急で王様がお呼びです」

女「なにかあったのか？」

兵士「それは、私にもわかりませんので、とにかく来いとおっしゃっております」

女「分かった、今すぐ行く、すまないなアリア今すぐ終わらせてくるから待っていてくれ、」

「ゆっくりやってきてください、私はこれから女王様に言われたとおりお墓参り行ってきましたから」

女「そ、そうかではまた話そうな、」

そう言つて、兵士と女王様は王様のところへ行ってしまった。

第一章 平和な日々（後書き）

そこに立っていたのは女王様だった。

「アリア・・・無事で良かった・・・」

第二章 スベテノハジマリ

「んー、良い天気!!」

そこには雲ひとつない快晴の空があった。

アリアは、王宮の中にある墓地へと来ていた。

さつきまでは女王様の部屋にいたので、晴れているのかさえもわからなかった。

「えーと・・・あった!!」

そこには、アリアの両親の名前が書いてある墓があった。

アリアは持ってきた花束を、そこに置いた、

「また来ちゃった、お父さんお母さん、」

アリアは、しばらくお墓に向かって今日会った事をすべてはなした、女王様から聞いた母親の初恋の話だったり、女王様とアリアの母親が会ったことの話など、まるで目の前に両親がいるかのように、ずっと話していた。

しばらくすると、後ろから真黒な格好をした男の人が話しかけてきた。

？「こんにちは」

自分に話したのかと思うとアリアは、

「こっこんにちは」

と、返した。

その男は、持っていた花束をアリアの両親の墓に置いたので、

「この人達のお知り合いですか？」

？「ええ、ちよつとしたね」

「そうなんですか、」

？「はい、この人達には、よくしていただきました」

「そうなんですか、私は少し記憶を失っているのであまりよく覚え
てはいないのですか、

良い人だってことは知っています・・・今も生きていれば・・・」

？「そうですね・・・」

その人は暗い顔をしてしまった、

「で、でもまだこの国にはいっぱい、良い人たちがいますよー!!」

？「そうですね、例えば？」

居すぎて・・・うまくまとめられない・・・

「王様とか女王陛下とかそれに王子たちも、それにあなただって」

？「私ですか？」

「はい、」

？「そうですね？良い人・・・ねえ・・・」

「???」

？「いや、何でもありませんよ」

少し気になったが、そこまで聞きたい事もなかったので、聞くのをやめた。

しばらくこの人と話していたら、

？「おーいアリアー、」

墓地の奥から、聞き覚えのある声があった

「紅様!!どうしてここに？」

アリアを呼んでいたのは、この国の第一王子の紅だった、

紅「いつも仕事しているお前が居ないと思ってな、女王に聞いたところだつていうから来たんだ」

「そうですねですか？」

紅「こらっ、敬語が抜けてないぞ」

「痛った、ごめん、」

王子とはいっても、アリアの友人の一人だ。

？「こらこら、女性の頭をたたいたちゃだめですよ、」

「あ、蒼もいたんだ、」

蒼「まったく、あなたって人も失礼ですね・・・」

「すいません」

蒼と言われたこの人は、この国の第二王子の蒼、そしてアリアの友人の一人、

蒼「ま、いいです．．それより、さっきまで誰と話していたんですか？？誰もいないようですか．．」

「え、誰もいないって、さっきまでここに．．ってアレ？？」

さっきまでいた、真黒な格好をした男の人がいなかった、

紅「どうしたんだ？」

ま、いいか、

「いや、なんでもないよ、ただの独り言だから．．．」

蒼「独り言ですか．．．．」

紅「．．．．」

紅と蒼が顔を見合わせて、黙り込んでしまった、
すると後ろから、

？「きつと、幽霊さんとお話していたんだよアリアちゃんは、」

「きやつ、り、凜かあ．．驚かせないでよ．．」

凜「えへへ、だってこうやって後ろからギュってすると、アリアちゃんの反応がおもしろいんだもん」

この人は、この国の第三王子の凜、そしてアリアの友人、

「うつつ、」

紅「こらこら、アリアをあんまからかうなよ、」

「とか言って、ほつぺた抓らないでくだひゃい．．」

凜「ぷっつはははっ、アリアちゃん何その顔、おもしろーいはははっ」

「笑わないでえ、蒼も止めてよ．．．」

蒼「止めるわけにいかないだろう、こんな面白いものを．．．ぷっ．．．」

「ひ、ひどっ！」

？「おーい、何やってんだ？．．．．ぷっ．．．はははっ」

「こ、豪！、止めて．．．」

豪「はははははっ．．．．．ああ、すまん．．．もっとやっついていぞ」

この人は、この国の第四王子の豪、そしてアリアの友人、

「うつつ・・・ぷつあはははっ」

四人「ははははっ」

しばらく笑い続けた。

紅「あー、久しぶりにこんな笑ったな、」

豪「そうだな、ここまで笑ったのは久しぶりだ、」

凜「そうだねえー、思い出しただけで笑えてくるよ・・・はははっ」

蒼「そうですね、昔を思い出すし、」

「そういえばそうだね、」

王子たちとは昔からの友人だった、アリアが両親を失ったアリアに話しかけてくれたのが、

この四人の王子達だった、そしていつもアリアの助けになっていたのがこの人たちだった、

友人より、親友と呼んだ方がいいんだとおもう

豪「そういえば、アリア（お前）と出会ったのってここだけ？」

「あ、そうそう、」

七年前

「お母さん、お父さん、また会いたいよ・・・」

当時のアリアは両親が亡くなったと聞かされて、ずっと悲しみにくれる毎日だった、

そしてそれを変えたのは、この四人の王子たちだった。

？「おい、なにしてるんだ？」

同じ年位の男の子が話しかけてきた。

「・・・誰？」

？「俺の名は紅だ、お前は？」

「アリア、」

紅「こんなところで何してるんだ？」

「何でもない・・・それじゃ・・・」

紅「おい、まてよ・・・って言っちゃた・・・ま、いいか、」
次の日、

「また来たよ、お母さんお父さん、」

アリアはいつものように花を持ってきては両親の墓にいていた。
？「こんにちは、」

また同じ年位の男の子が話しかけてきた。

「誰・・・？」

？「私は蒼と申します、あなたは？」

「アリア・・・」

蒼「良い名前ですね、よかったら何しているか聞いてもいいですか？」

「なんでもない・・・それじゃ・・・」

蒼「ああ、行ってしまった・・・」

次の日も、次の日も、同じようなこと聞かれたが、アリアは気にはしなかった、

でも、そんなあるとき、

「またあの子達居るのかなあ、」

ここ最近お墓にいと男の子たちに何か聞かれるのが嫌なので、あまり行きたくなくなってしまった、

でも来てしまった、

「あれ？いない・・・」

そこには誰も居なかった

「・・・！！」

だけど一つ違ったのは、アリアの両親のお墓にきれいな花が4本置いてあった。

「赤色、蒼色、緑色、黄色、の花？」

すべて違う色で違う種類だったけど、置いた人の招待は何となくわかった。

「あの人たちか・・・」

なぜか、気持ちが少し楽になった、

「明日あったら、お礼を言おう・・・」

翌日、

「今日居るかなあ・・・居ても困るんだけど・・・前までは、」

そう前までは・・・今は、お礼が言いたいただけ、

凜「あ、いたいたー！！みんなー来たよアリアちゃん」

「こんにちは・・・凜さん・・・みなさん・・・」

凜「凜でいいよ、」

豪「豪でいい、少しは話せるみたいだな」

「はい・・・今日は皆さんに用事があつて・・・」

紅「用事？」

「はい、まず一つ聞きたいことがあつて、」

蒼「何ですか？」

「ここに、花を置いたのつてあなたたちですか？」

豪「ああ、そうだけど」

やつぱり・・・

紅「気にいったか？」

「えつと、あの、ありがとうございます・・・ただお礼が言いたくて」

凜「お礼を言われるくらいじゃないよ、あ・・・」

「・・・？」

蒼「さつきまで、寝ていました？」

「は、はい」

な、なんで分かったんだろう？

豪「口の周りにひげみたいに跡がついてるぞ？・・・プツ」

な、・・・恥ずかしい・・・

「・・・」

凜「豪笑っちゃっダメだよ・・・」

「・・・ぷっはははっ」

蒼「あ、笑った」

紅「やつと笑ったな、プツ・・・」

四人「はははっ」

その後、アリアはこの四人と仲良くなり、だんだん毎日の悲しみが薄れてきたそしてその四人が、

王子になると分かって、アリアもその支えとなるよう、メイドになった。

で、今に至る。

紅「懐かしいな・・・」

「そうだね、」

蒼「今思ったけど、最初は何にも話さなかったよな、」

凜「そうそう、アリアちゃん、名前だけ言ってすぐどっか行っちゃったんだもん」

「そ、それは・・・」

そのときすごい、立ち直れなかったんだもん

豪「ま、そのくらいにしておけ、もう過ぎたことなんだから、」

凜「はい、わかりましたですう」

「でも、ありがとう」

四人「・・・？」

「私がねこんなにも立ち直れたのは、みんなのおかげなんだ、だからいくらお礼を言っても足りないくらい何だけど・・・だから、ありがとう」

四人は顔を見合わせた。

四人「こちらこそありがとう、アリア」

ここは、どこかの屋敷、

この屋敷の部下だと思われる女が、主人だと思われる男に話しかける、

女「・・・様、例の計画はいかがいたしましたしょう？」

男「明日決行する、いつでも決行できるように準備をしておけ、」

女「は、かしこまりました、下の者に言っておきます」

そう言つて女は、どこかへ行つてしまった。

男「ああ頼む、それにしてもこの屋敷には飽きたな、まあでももうすぐ新しい屋敷が手に入る、

それまでの辛抱か・・・」

男は、窓の外を見ながらフツ、と笑った。

第三章 突然の来客

時刻は朝、

「すうーすうー．．．んん」

マ「起きてー！！アリア、今日は忙しいのよ！！」

「んん．．．って、マロンおはよ、」

マ「おはようじゃないわよ．．．早く起きて！」

「うん、」

そう言つててきばきとアリアは支度をする。

マ「じゃあ、行くよ！！」

アリアが準備したのを確認すると、二人は部屋を出た。

ざわざわ．．．

王宮は、いつもは騒がしいが、いつも以上に騒がしい。

「なんか、騒がしくない？」

マ「アリア、話聞いてた？今日は忙しいって．．．ま、いいや寝ぼけてたもんね．．．」

「そうなんだ、ゴメン．．．って何があつたの？」

マ「なんか、噂によると昨日お客さんが来たんだって、」

「それであ．．．でも、やけに騒がしくない？？」

マ「ああそれは、その来たお客さんが王様の知り合いとか何だとか．．．もしかしたら、上級騎士になるかもしれないって噂であつたわよ、えっと何だっけ．．．確か名前は．．．」

考えていると、急に後ろから声をかけられた。

？「夜様でございますよ、」

マ「あ、そうそう．．．って誰！？」

？「ああ、すみません、急に話して驚かせてしまつて．．．僕は、

黒に兎と書いて黒兎と言います」

黒兎クロトといった男は執事の燕尾服と着ていて、いかにも執事って感じ

だった。

マ「はあ、」

黒「ええと、僕はあそこに居らっしゃる夜様の専属執事ですがよろしくおねがいします、」

マ「よろしく、ってひとつ気になったんだけど何で上級騎士に専属執事が付いているのかしら、

もしかして”コネ”とか使ったんじゃない？」

「ちよつとそんな言い方は・・・。」

黒兎は、困った顔一つせず、むしろニツコリ笑ってこう答えた。

黒「”コネ”なんてまさかそんなことないですよ、ちゃんと夜様は“実力”でございますよ、そしてちなみに我が主は、もともと家柄が上級騎士の家系なのでこうして執事も付いているわけなのですよ、」

黒兎がそう言いきると、マロンが少し悔しそうだったが、相手を認めたかのような表情だった。

マ「ええ、そんな完璧なお家柄の執事なのだから、あなたもなかなかやるようね？」

黒「いえいえそんな滅相もない、王宮の執事のセンパイ方に比べたら私はまだまだ、未熟者でございます」

マ「そうかしら？ま、でもここでいくら疑ってもきりがなさそうだからやめておくわ、それよりここに何しに来たのかしら？？あの夜様についているのではなくて？」

黒「ああ、それは、その夜様にいわれてここを手伝うようにと、それでここに来ました」

「そうなんですか、でも悪いですよ、いくら執事といえどお客様なのですから」

黒「いいえ、そうでもないですよこれくらいのこと当然です」

ニツコリと、言われたのでとても言い返せなかった。

そしてマロンも、黒い笑みで、

マ「・・・それじゃあ仕方ないわね人手は余るほどほしいから私に

ついてきてちょうだい、執事サン？」

黒「はい、望むところですよ」

「どうやら、二人の間に火花が散ったようだ、しかも嫌なほうに・・・。」

「え、あ、ちよつと、いいの？」

マ「いいのよ、今日はいつも以上に忙しいんだから、それにあの執事サン試してみたいし、」

「それもそうだけど・・・。」

マ「はいはい、仕事につく！」

「う・・・。」

タツ——タツ——タツ——

「あ、マロン！！仕事場の場・・・所・・・って行っちゃった・・・。」

「どうしよう、二人の会話だけで仕事場聞くの忘れちゃった・・・。」

王宮の仕事は、毎回仕事場が変わっていて、パートナーの一人が上司から役割を聞いて相手に教える。

という役目になっている、ちなみにアリアのパートナーはマロンである。

今日の仕事場は、マロンと別々だということしか聞かされていないかったので、場所が分からないのだ。

困っていると、後ろから、

女「どうしたのじゃ？」

「じ、女王様！！」

女「そんなおどかなくてもいいじゃろう？それよりどうしたのじゃ??？」

とても、仕事の場所忘れたなんて言えなかった。

「ええと・・・それは・・・その・・・。」

女「もしかして・・・仕事場が分からなくなったのか？」

「う・・・。」

図星、しかしこの後、予想もつかない言葉を女王様に言われた。

女「なんとなく見当はついてたからな、わらわはお前の仕事場知っておるぞ？」

女王というからには、ちゃんと仕事もしている。

ちなみにこの国は王が二人いる、もちろんそれは王様と女王様のことだ。

「え、本当ですか？ありがたいです・・・すみません」

女「謝ることはない、誰にでもありうることじゃ、それでなお前はこつちじゃついてこい」

女王様に言われつれてこられたのは、王座のある大広間だった。

メイドとしてもここは滅多に來ないのだが、1度か2度くらいは來たことがある。

大広間には、王様とそのお付きの人とお客様と思える人が王様の前に膝待^{ひざま}ついていた。

女「レオン、お前に言われたとおりアリアを連れてきたぞ、」

レオンとは、この国の王様のことだ。

王様と女王様は名前で呼び合ってる、とても仲がいいので・・・。

王「おお、ありがとうリオン」

女「ああ、ではわらわは仕事に戻る、」

女王が、大広間から出ようとしたので、

「大広間^{じい}までありがとうございました」

アリアはお礼を言った。

女「これくらいでお礼を言わなくても大丈夫じゃぞ？」

そういつて大広間を出た。

しばらくの沈黙の後、

王「コホンッ、ではアリアこれから仕事内容を教える、」

「はい、」

女王様にはあるが、王様からは滅多に呼び出しをされないの少し緊張してしまう、

王「そこにいる客人のおもてなしをしてもらいたい、」

「はい・・・えっと・・・。」

王「ああ、すまん、紹介するこの人は私を守る次期上級騎士が来てな」

「上級騎士……。」

その名前には、聞き覚えがあった。

でも、なかなか思い出せない記憶だった。

すると、

王「ああ、そうだ、お前の両親も上級騎士だったな、だからこの仕事を前前に任せたんだ」

「ありがとうございます」

王「すまん、夜、我々だけで話してしまつて」

夜「いえいえ、滅相もない」

夜と呼ばれた青年が振り向くと、そこには見覚えがあった。

「あなたは……！！あのとき墓場であつた……。」

王「何を言っている？彼は、昨日の夜に来たばかりだぞ？」

「そんなつっ、」

そんなはずない、確かに見覚えがあった。

でも……、

夜「はい、王様の言う通りでございます、俺は昨日の夜ここに来ました」

夜の表情は本当のようだ、何も知らない顔をしている。

いくら疑つてもきりがないうだ、もうこのことはよしとしよう。

王「では、改めて紹介する、この男は次期私の上級騎士になる夜だ」

夜「よろしく願います……えつと……。」

「アリアです、こちらこそよろしく願います。」

挨拶をすますと、王様が思い出したようにこう言った。

王「そういえば、夜も記憶があまりないそうだな」

夜「ええ、親の顔も忘れてしまい、悔しい限りでございます」

私と同じだ、私のほうは親の顔はうつすらとしか覚えてはいない。

王「ということだアリア、偶然同じ境遇のものがいてな、お前ならわかるような気がしてこの仕事をお前に任せたい、良いかの？」

「はい、私で良ければ」

王「夜もいいか？」

夜「はい、もちろんでございます」

王「ではアリア、これから一週間夜の世話をしてもらう、そして夜、これから一週間城で修行してもらう、良いな？」

「はい、分かりました」

夜「分かりました王様、この一週間でより強くなることを保証しましょう、」

王「おお、期待しておるぞ」

そのあと、アリアと夜は大広間を出た。

アリアは、王様に言われたように夜を客室まで案内しているところだった。
すると、

夜「大丈夫ですか？さっきのでだいぶ緊張してらしたんですね、」
はい、つとここで答えると王宮のメイドとして恥ずかしいので、つい意地を張ってしまう。

「いえ、よくあることなのでもう慣れました、夜様は大丈夫ですか？」

ありもしない嘘をついてしまつても、相手にはもうバレているようだ、やっぱり嘘はなれない。

夜「大丈夫ですよ、こうゆうことは慣れているんで・・・それより大丈夫ですか？嗚呼、やはり緊張されていたんですね、誰でもあ言ったところでは緊張しますもんね、私も実は少し緊張しましたごめんなさい、少し嘘言っちゃいましたね、」

夜の優しい一言で、さっきまでの大広間での一気に緊張が解けた。

「お優しいんですね、わざわざ私にまでお気を使ってくださつて、夜「いえいえそんな、いつも道理にしたまですよ、」

よると二人で話していたら、王様に言われた客室についた。

「あ、着きましたよ、ここがこれから夜様のお部屋でございます。」
夜「ここですね、ここまで送っていただきありがとうございます、」

「いえいえ、これくらいもちろんです!!あ・・・後でお紅茶をお
疲れでしょうから、

お持ちしてもよろしいでしょうか?」

夜「じゃあ、お願いしようかな?」

「はい!もちろんです!!!」

第四章　トラブルは嵐とともに

「失礼します、お紅茶をお持ちいたしました。」

私は今、夜の一時専属メイドをしている。

夜「ありがとうございます、入って」

「失礼します、」

中へ入ると、夜の座っているイスの横にテーブルがあつたのでそこへ紅茶を置いた。

「では、私はこれで失礼します、何かございましたら気軽にお呼びください、」

アリアが扉へ向かおうとした瞬間、

夜「あ、ちよつとまって、」

「・・・？な、何でしょうか？」

夜「一緒に紅茶飲まない？」

「でも・・・わるいですよ、」

夜「紅茶を飲みながらあなたとお話がしたいなあ〜と思ひまして、ダメですか？」

ここまでいわれちゃさすがにアリアも逆らえないのであつた。

「では、私でよろしいのであれば、」

夜「良かった、じゃあそこに座つて？」

「はい、ではお言葉に甘えて」

少しだけだつた紅茶時間ティータイムは、夜と話しているうちにいつの間にか夕方から夜になつていた。

「あ、もうこんな時間になつちやいましたね、」

夜「そうですね・・・あ、すみません、こんなお時間を取つてしまつて、」

「いえいえ、私も話していたわけですし、すみませんね・・・あ、もうそろそろ行きますね、夜様の夕食の準備をしなくてはならない

ので、では、」

アリアがドアへ向かうとまた夜に呼び止められた。

夜「待って、最後に良いかな？」

「はい？何でしょうか？」

夜「俺のこと、様をつけなくていいよ？呼び捨てで構いませんし、」

「いえ、そんなの無理ですよ・・・、」

色々上下関係があるし、一応夜のほうが上だし、

夜「ま、そのうちでいいです、あと、また俺と一緒に紅茶を飲んでくれますか？」

「はい、もちろんですよ、」

そういつてその場を後にした。

修行一日目、

「よいしょつと、」

今は、夜が剣の修業をしていて夜の使っている客室には誰もいないので、アリアは客室を掃除していた。

「あとは、ベッドメイクをやるだけだね、」

？「なーにしてんの？？？」

聞き覚えがある声が聞こえた。

「凜！！どうしてここに？？」

凜「それはねー王様が、上級騎士探して王子たち暇なおー」

「ああ、だからここに・・・って私は暇じゃないのよ！？」

凜「でたでたーアリアちゃんの突っ込みー！！ねえ、お願い遊んで？」

はあ・・・こうなると凜は止められないんだよねえ・・・。

「わかった、このベッドメイクで終わりだから、それまで待ってて、」

凜「了解なりー！！」

「ふう、終わった・・・。」

凜「終わった？終わった？」

「終わったよ、」

凜「じゃあ、レッツゴー!!」

急に凜に手をひかれたので、転びそうになる。

凜「着いたー!!!」

「はぁ・・・早いよ凜・・・って庭？」

連れてこられたのは、城の庭だった。

凜「うん、お庭だよ？」

「何でまた・・・。」

凜「あ、そうだ、アリアちゃんおなかすいたでしょ？」

「すいてなんか・・・。」

ぐううう

凜「ふふっほらねえ？」

そういえば昨日の紅茶の時間から何も食べてないんだった。

自分で自分が恥ずかしい。

「何でわかったの？」

凜「それはねえ・・・偶然アリアちゃん見かけて後を追ってみた
ら急にアリアちゃんのお腹が鳴ってね、でもアリアちゃんが気づか
ないから仕事が終わるまで待ってたんだ、」

「そうなんだ・・・。」

ますます恥ずかしい・・・。

凜「だから僕、アリアちゃんのためにお昼作ってたんだよー!!」

庭にあるテーブルに置いてあったのはおいしそうな料理が置いてあ
った。

「これ凜が作ったの???すごい!!!!!!」

凜「えへへ、さ、早く食べよう」

「え、あ、うん」

凜に進まれるまま、食べることになった。

「い、いただきます。」

「・・・おいしい、」

凜「そう？よかった！！！」

凜のおいしい料理を食べていると見かけたことのある人を見つけた。

「あれ？夜さん??？」

凜「・・・??どうしたの凜ちゃん??」

アリア達に気付いたのか夜はこちらへ来た。

夜「アリアさん、こちらにいたんですね、あ、凜王子、お初にお目にかかります。」

凜「こんにちはー！！夜さん、王様からすべて聞いてるよ、修行頑張ってるね！！」

夜「光栄です、あれ？アリアさんどうしたんです？顔色悪いようですよ・・・」

あれ？頭がくらくらする。

アリアはその場に倒れたのであった。

凜「・・・丈夫、アリアちゃんアリアちゃん！！！」

「り・・・ん・・・?」

倒れてようやく目が覚めるとそこは自室だった。

目の前には凜と夜がいた。

凜「ごめんねアリアちゃん、僕料理にすっかり漢方を入れすぎちゃった・・・」

だから、食べた後少し気持ち悪くなったのか、

そう言えば忘れてた・・・。

以前、紅たちが言っていたことを、

紅「いいかよく聞け、凜の料理だけは絶対食べるな、」

今思い出した。

でも遅い。

夜「凜王子、すっかりじゃないでしょう、」

凜「えへへ、大丈夫？アリアちゃん、」

「気絶しただけだから大丈夫、」

夜「でも、もう少し寝ていてください、あと凜王子、さつき兵士が探しておりますよ」

凜「そうなの？じゃあ、もう僕行くね、夜くん、アリアちゃんを頼むよ、」

修行二日目、

「ふぁーあ……って夜さん!？」

昨日あれから寝てしまい、起きたらベッドに寄りかかって寝ている夜が居た。

「夜さん、あれからずっと居たんだ」

ふいに頭を撫ででしまう。

その反動で夜が起きた。

夜「アリアさん？よかった起きたんですね!!」

よかった頭撫でたの気づいてなくて……。

「はい、おかげでばつちり目が覚めました!!すみません、つきつきり看病してくれてみたいで」

夜「いえいえ、これくらい大丈夫ですよ、」

夜がたちあがりその場を後にしようとした瞬間、突然アリアのほうへ倒れて行くのだった。

「え、ちよつと、あの……って寝てる……。」

夜「zzzz……。」

いかにも押したおされたかのような形になっていて、のけようにも重くてのけられなかった。

「どうしょ……。」

顔が近いな……。

でも、改めてみると、顔立ちがいいせいがかっこいい。

は!!!!今はそんな場合じゃない!!!この状況を何とか打破せねば!!!!!!

しばらくそのまましていると、

紅「おーいアリアー、お前凜の料理食べたって？だから前に言っ
る・・・って邪魔した」

今の状況で勘違いするのは当たり前だ。

「まってー！！たすけてー！！」

何とか紅を説得して夜をどけてくれた。

紅「何だ、そういうことなのか、俺はてつきり・・・いや何でもな
い、そうなら早く言ってくれよ、」

「いや、言おうとしたけど逃げたでしょ？」

紅「だってあの状況じゃ、誰もが勘違いするだろ！？」

「そうだけど・・・ま、いいや、助けてくれてありがと、」

紅「あ、ああ、また困ったことあったら言ってな、」

「うん、じゃあね、」

修行六日目、

ザアツ——アツ——。

「雨すごいなあ・・・。」

アリアは、夜が来るまで自室で休んでいた。

「夜さん結果大丈夫かなあ??」

夜は今、修行の結果が明日出るため、今は前日試験を行っている。

アリアは、夜の一時専属メイドなので夜が来るまで、仕事がない。

「それにしてもすごい雨だなあ」

？「そうですね、」

その声が聞き覚えのある声だった、

「夜さん！！！！どうでしたか前日試験は？」

夜「王様に見込みがあるといわれてね、結果はいい方だと思うよ、」

「よかったです！！きつと立派な上級騎士になりますよ！！！！」

なんだか自分のことのようにうれしい半面、悲しく思えた。

「でも・・・もう明日で夜さんと会えなくなるんですよね？」

そう、上級騎士とメイドでは、格差が違うのだ。

そう、落ち込んでいると、急に夜がアリアを抱きしめたのである。

「え？夜さん・・・？」

夜「君と会えなくなるなんて嫌だとは変だろうか？」

「変ではないですけど・・・。」

おかしい、私はこの人が好きなのに恋愛感情としては受け入れられないのだ。

好きなのに何で？

頭の中にある何かの記憶が私を否定する。

夜「初めてだ・・・こんなに人を好きになるのは・・・もし、俺が上級騎士になったら俺と結婚してくれないか？」

「えっと、あの、」

急なプロポーズに動揺してしまい言葉が返せなかった。

夜「返事はすぐでなくていい、ずっと待っている」

そいつって、拒否する間もなく出て行ってしまった。

修行最終日、結果発表、

「良い月だなあ、」

昨日と同じで夜を待っていた、でも、昨日と違うのは、

「夜さんに会ったの緊張するなあ・・・。」

昨日、プロポーズを受けたのであった。

「大丈夫かなあ？受かったのかなあ？」

？「もちろん受かったよ、」

「よ、夜さん！！・・・きゃあ」

急に夜がまたアリアを抱きしめたのである。

夜「昨日の答えまだ聞いてないから、今聞いていい？」

今なら言えそうな気がした。

アリアは、抱きしめられた腕を離した。

「ごめんなさい、まだ私には結婚は早いようです、まだ私には家族と言っていい人たちがいます、その人たちのためにまだ支えてゆきたい、それに夜さんには私よりか、もっといい女性が訪れると思います、だからすみません、」

夜「・・・分かった、無理にこんなことして済まなかったな、でも、
もしまたその気になったら、いつでも返事を待ってる。」

「はい、」

そのあと夜は、自分の部屋へ行った。

ここからだ。歪みだした歯車が動くのは・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9468v/>

——Cross Guardians ?—— 四つの国の物語

2011年12月28日22時54分発行